OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	保坂本源氏物語の表現 ： 「けはひ」と「けしき」
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1996, 20, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67386
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

保坂本源氏物語の表現

―「けはひ」と「けしき」―

伊井　春樹

一　「けはひ」と「けしき」の境界

寛弘五年（一〇〇八）七月十六日、紫式部は中宮彰子のお産の里下がりに従って土御門邸入りし、ほどなく『紫式部日記』の執筆にとりかかり、現存本によると「秋のけはひ入りたつままに」と書き始めた。この表現について、旧来は「秋のけはひたつ」とか「秋ののけはひのたつ」とあったのを、黒川本や日記切の「秋のけはひ入りたつ」とする本文の優位性が説かれ、今日では疑いようのない解釈として支持される。ところが、この記述を利用した『栄花物語』（巻八、初花）[1]では、梅沢本によると「あきのけしきにいりたつまゝに」とあり、その「けはひ」と「けしき」の違いについて、『紫式部日記』[2]では「『けしき』は客体たる対象のもつ性格が、明らかに外部に表出し、之を視覚によって捉え得るが如き場合に用いられる」とし、「『けはひ』は対象のもつ性格が、外部に表出せず、しかも直観によってそれとなく感得し得るが如き場合に用いられる」と説明し、この場面では「けはひ入りたつ」が至当とする。以後この立場は継承され、『紫式部日記全注釈』[3]でも「『気色』は、より表象的視覚的な対象をさし、『けはひ』は、より心象的感覚的な印象をさすのであって、この場合は秋気が深まるにつれて土御門第の光景が趣を加えてゆくことを述べているのであるから、やはり日記本文の『けはひ』を正しとすべきであろう」と解説する。

たしかに紫式部は道長邸で過ごしながら、視覚としてとらえられる秋の具体的な兆候への言及とするよりも、邸内全体に広がっていく、秋の深まるまさに「けはひ」を敏感に感じとっての表現とするほうが、文学的にもはるかにすぐれた的確な描写といえるであろう。それを『栄花物語』は誤読し、すぐ後に続く「池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ」とするように、木々や草

の葉の紅葉しているさまから「けしき」としてしまったのであろうか。もっとも、富岡甲本では「秋のけはひ」とするのは、『紫式部日記』の本文に引かれての改訂だったのかも知れない。

池田亀鑑博士は、もともと『紫式部日記』には「秋のけはひ入立つ」「秋のけはひの入立つままに」とあったのを、『栄花物語』では「入」を「の」とし、さらに「に」と誤写して「秋のけしきに入立つままに」としてしまったのであろうと想定する。「入り立つ」は、「入りこむ」「入りて親しむ」の意であるにもかかわらず、「春たつ」「秋たつ」などの季節の到来の「立つ」と混同したという。『紫式部日記』本文は早くから誤写されて「秋のけしきに入りたつままに」とされて『栄花物語』に継承され、一方ではもとの表現も「秋のけはひたつままに」となてしまったのであろうか。『栄花物語』の成立当時、すでに「けしき」とする本文が存在したのか、誤った判断から「けしき」としたのかはともかく、「けはひ」と「けしき」はきわめて揺れのあることばとして存在していたのは確かである。

また、「入る」が「深まる」の用例として示される『源氏物語』椎本巻は、

七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槙の山辺もわづかに色づきて、なほ、たづね来たるに、をかしうめづらしうておぼゆるを、（古典全集本、五―七〇）

とあり、ここでは「風の音」の冷やかさ、槙の葉の色づき具合からの判断なのであろう、「秋のけしき」と表現し、まだ都にはこれほどまでには訪れていないとする。しかし、それも時間の問題で、やがて今見る音羽の山辺と同じく、都でも風の音は冷やかにになり、紅葉も眺められるはずである。これを「けしき」と表現するとなると、土御門邸での「池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ」とし、「やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ」などの「けはひ」とどれほどの径庭があるのであろうか。『栄花物語』のように、この場面を早くから「けしき」と認識する立場も存したのであり、椎本巻の同じ場面を、別本の保坂本が、

七月ばかりにや、宮こにはまだいりたたぬ秋のけはひを音羽山ちかからん風の音もいとひややかに、

と、同じ景観を「けはひ」のことばで表現する例も見られる。

「けはひ」と「けしき」は、基本的には観念的に対して具象的であり、感覚的であるのに対して視覚的と分類できはするものの、椎本巻に見られるように「風の音」の「冷やか」さも「けしき」の範疇に入るとなると、単純に分類するのはきわめて困難になってくる。そのような背景もあるのであろうか、保坂本は諸本の中でも孤立した本文ながら「けはひ」

とするのは、それなりの表現意識が存したからにほかならない。土御門邸の「けはひ」にしても、「けしき」がまったくの誤りと断定することはできなく、流布した当初から両語句が併存して読まれていたのであろう。このように、「けはひ」と「けしき」はかなり古くから混乱もみられたようで、それは場面をどのように理解するのかといった、読みの方法ともかかわってくる。

保坂本の書誌については、別に紹介したことがあるので省略するが[4]、鎌倉期書写の別本三十四帖を含む本文で、陽明文庫本とはまた異なった物語の世界を持つ[5]。それを一まとめにし、保坂本の別本としての性格をトータルとして論じるにはためらいがないわけではないが、そうなると陽明文庫本でも伝称筆者の異なる一帖一帖は別に取り扱わなければならなくなるし、青表紙本であっても、巻によっては河内本や別本と近接した様相を呈するだけに、はたして定家が入手したのは取り合せ本ではなく、紫式部時代のセットであったのか、などと疑えばきりがなくなる。私は一つ一つの本文を、他本との校合によって読むのではなく、あくまでもそれぞれの物語世界を持つ作品として解釈しようとする立場にある。椎本巻での音羽山の景観にしても、それを「けはひ」としたのは、保坂本の必然的な世界と理解し、そうすることによってどのような物語が展開するのかをたどっていきたく思っている。

光源氏が女性たちをそれぞれ花にたとえる場面で、まず女三宮について「これこそは、限りなき人の御ありさまなめれ」（若菜下、四―一八三）とし、続いて、

女御の君（明石女御）は、同じやうなる御なまめき姿の、いますこしにほひ加はりて、もてなしけはひ心にく く、よしあるさまし たまひて、よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりてかたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる。

と、それ以上に優美な姿の明石女御を称賛する。ここでの「けはひ」は、外面的な振る舞いとしての「もてなし」のほかに、内面の「けはひ」のおくゆかしさが言及される。この本文について、保坂本や阿里莫本では「もてなしけはひ心にくく、よしあるけはひしたまひて」と、「さま」を「けはひ」とする。直前にも「けはひ」のことばを用いているだけに、熟さない表現と処理し、無視してしまうこともできるものの、この「さま」は明石女御の全体を統轄する表現として存するだけに、具象的な姿態を念頭に置いたことばよりも、醸し出す雰囲気としての「けはひ」のほうがふさわしいのではないか。このような場合、洗練された文体として「さま」の優位性を強調するのではなく、重複感はあるものの、「けはひ」とする本文の存在も認め、その表現しようとする世界を素直に読むべきであろうとするのが、私の主張したい点である。とかく、作者の著作したオリジナルは唯一であったとの観念から、室町中期以降流布本としての地位を占めるよう

になった青表紙本の絶対性を説くのではなく、所詮それとて定家にまでしか遡及できない本文だけに、別本に語られたような物語世界の存在も認知すべきであるとの提唱といえよう。

もう少し続けると、

①「何ごと言ふぞ。おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし、見棄てて死なむはうしろめたし」とのたまふに、いとをかしきさまのみまされば、こまやかに笑ひて、（夕霧、四―四五九）

と、嫉妬して怒る雲居雁の「さま」を見るにつけ、夕霧はますますいじらしいかわいらしさを覚えたという。この「さま」を、別本では「けはひ」（御陽保国・諸本の略称は源氏物語大成による）とし、具体的な姿態の「をかし」さではなく、彼女の言動から感知される様相に夕霧は心引かれたと解釈する。「さま」の持つ概念は、「けしき」と共通した外面的、視覚的なことばとして機能しており、夕霧はいわば心理的にも距離を置いた対象として目にしていることになる。保坂本を中心とした用例をさらに示すと、

②あなめでた、をかしげとも見えずながら、なまめかしうあてにきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。（東屋、六―四五）

＊さま―けはひ（御保池）

③女（浮舟）は、母君の思ひたまはむことなど、いと嘆かしけれど、艶なるさまに、心深くあはれに語らひたまふに、思ひ慰めて下りぬ。（東屋、六―八九）

＊さま―御けはひ（御保池）

とあり、「さま」でも「けはひ」でも文脈においては不都合なく解釈ができ、しかもそれほどの大きな差異は認められない。ただ、どちらかといえば「けはひ」の本義として持つ、内面から発散する雰囲気を包み込む、より多面的な認識が示されていることは疑いようがない。

このような「さま」の描写が、保坂本などの別本ではすべて「けはひ」に置換されるというのではなく、大半はそのまま青表紙本と共通するものの、いくつかの例に見られるようにことさら「けはひ」とあるのは、誤写とか偶然というのではなく、やはりそれなりの存在意義のあることばとして位置しているはずである。保坂本などの書写者が勝手に解釈して挿入したのではなく、本文の流布という長い歴史的時間の流れの中で、それぞれ伝本ごとの世界が構築され、読みつがれていった証跡なのだろうと思う。

二　「けはひ」から「けしき」へ

『源氏物語』において、複合語を含めた「けはひ」の用例は三七四語、「けしき」は七八二語を数えることができ、そ

れまでの「けしき」の圧倒的な利用数の多さからすると、「けはひ」のことばをフルに利用し、それよって表現効果を高めようと明らかに意図した作品であったと知られるであろう。根来司氏によると[6]、「けはひ」は和歌の世界には用いられることなく、散文でも平安中期から見えはじめることばだとし、「けしき」については平安朝初期のもっぱら人間の様子の描写から、やがて自然の景物にも用いられるようになったと考証される。この方向は『枕草子』にもそのままあてはまるようで、そこから視覚的な「けしき」を多用する清少納言は「観察者記録者」であったとの論も導き出される[7]。

『源氏物語』について述べると、「けはひ」や「けしき」の用いられ方というのは、勿論他の表現や敬語の方法にいたるまでそうなのだが、これまではすべて青表紙本による立論であり、河内本とか別本それぞれの伝本の表現世界がとりあげられることはほとんどなかった[8]。「けはひ」についても、すでに「さま」で見たように、別本ではそのまま継承されることなく、別の表現を用いることによって、あらたな読みの可能性が展開していた。このような例を数値だけから示すと、「けはひ」は六四語（一七パーセント）、「けしき」は八三語（一一パーセント）が、別本の諸本では別のことばになっているか、脱落してしまっている。もっとも、「けはひ」とか「けしき」が加えられたことばも存在するので、差し引いた数だけ青表紙本から用語数が減少したというわけではない。先ほどの「さま」とは逆の例として、「あはれと思しぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきに思す」（夕顔、一―二二〇）を示すと、光源氏は自分を避けようとする空蝉が恨めしく、いつまでも忘れられないとする場面において、別本の陽明文庫本では「人のさま」（河内本も同じ）とある。彼が恋しく思い出すのは、忍び入って契りをかわした姿だけに、「けはひ」とするよりも「さま」のほうが具体性があるようにも思われるが、大半の本文がそうであるように「けはひ」の表現が不適切というわけではない。

青表紙本と別本とで交替していることばには、「けはひ」から「心」「けしき」など、「けしき」からは「ありさま」「ぎしき」「けはひ」「心ち」「心」「こと」といった例を拾い出すことができる。青表紙本の「けはひ」が別本諸本で「けしき」と表現されるのは一九例、そのうち一一例が保坂本、阿里莫本・御物本・陽明本・国冬本・横山本が各三例ずつという内訳を示す。これなども、保坂本がきわだった現象を呈するが、物理的とか、偶然によるのではなく、これまでも考察してきたように、それなりの表現価値を持ち、「けしき」として読んできた世界が保坂本に定着した結果と理解すべきであろう。表現されたことばを尊重し、人物相互の関連や内実にそって読むと、語り手はどのような展開をそれぞれの場面でしようとしたのか、物語のあらたな広がりが見えてきそうである。

①はじめより懸想びても聞こえたまはざりしに、「ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし。ただ深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけたまふをりもあらじやは」と思ひつつ、さるべき事につけても、宮（落葉宮）の御けはひありさまを見たまふ。みづからなど聞こえたまふことはさらになし。いかならむついでに、思ふことをもまほに聞こえ知らせて、人の御けはひを見むと、思しわたるに、御息所、物の怪にいたうわづらひたまひて、小野といふわたりに山里持たまへるに渡りたまへり。（夕霧四―二八三）

落葉宮を恋い慕う夕霧だが、心のうちを伝えて、「御けはひ」を見たいと思い続けているうちに、母御息所が病気になり小野に移り住むことになってしまった。異文を示すと、

御けはひを―御けしきをも御陽保―けしきをも国―御心をも麦阿―御気色をも河

とあり、非青表紙本ではほぼ「けしき」が多数を占める。ただ文脈からすると、ここで用いられる「けはひ」は、「宮のご様子を見よう。宮がどう思われるか、その反応を見よう、の意」（古典集成本頭注）とするのが正鵠を得ており、夕霧が落葉宮の姿を見たいとするのではない。それが保坂本などのように「人の御けしきをも見む」と表現されると、思いを打ち明けるだけではなく、落葉宮の姿なりとも見たいものということになってくる。

夕霧は初めから懸想の心をもって通うようになったわけではなく、また彼の性格からしても直接的な求愛行動をとることはできない。その対処の方法として、彼はまず第一段階は自分の「深き心ざし」を知ってほしく、それによって心うちとける機会が訪れるのではないかとの期待であった。夕霧は、自分の誠意のほどを態度で示し続けたのだが、その反応はどうであったかと、「さるべき事につけても、宮の御けはひありさまを見たまふ」と、落葉宮の様子をうかがっていたのである。『萬水一露』では、「女二宮の、こころにまかせて様躰を夕霧の見給なるべし」と、夕霧は落葉宮の姿を思いのままに見ていたと解するものの、この場面はまさに落葉宮の「けはひ」や様子をうかがっていたに過ぎなかったのではないか。夕霧は思いを寄せている素振りも見せず、寡黙のままでひたすら好意のあふれた世話に徹し、必要があれば母の御息所にことばをかけるという接し方で終始し、それとなく室内の「けはひ」や女房たちのありさまを観察していたのであろう。「みづからなど聞こえたまふことはさらになし」と、落葉宮は夕霧に返事をすることは勿論、御簾越しにでも近くに寄ることなどはしていなかったのである。

これとパラレルになるのが第二段落で、何の成果もないまま日数だけは過ぎてしまうため、夕霧は次の手段として「思ふことをもまほに聞こえ知らせて、人の御けはひを見む」と、今度は直接行動を起こす企てを考えたという次第なので

あろう。青表紙本では、それまでの沈黙を破り、夕霧は心のうちを訴えるだけ訴え、後は宮がどのような反応をするのか見てみたいということになる。しかし、これはいかにもまわりくどく、悠長な方法と言わざるを得ず、それで芳しい成果がなければ彼はあきらめるというのであろうか。すぐ後で、夕霧は消息を伝える女房について部屋に入り、奥に逃げようとする落葉宮の衣の裾を持ち、障子を中にしながらも一夜過ごすという、大胆な振る舞いに及ぶ。まず苦衷を訴え、その反応を見てから態度を決めようといった行動様式ではない。保坂本などのように、思いを打ち明け、「人の御けしきをも見む」と、落葉宮の姿そのものを直接見たいという、これは契りを結ぶ意味にも通じるのだが、そのような行動を考えていたとするほうがこの場面ではふさわしいように思われてくる。

「けはひ」か「けしき」かという、わずかに一つのことばの違いにすぎないにしても、それぞれの場による使われ方によっては、夕霧の行動を規制する大きな問題へと広がってくることになる。様子をうかがうだけではもはや埒が明かないだけに、保坂本のように落葉宮に心のうちを伝え、逢ってしまおうとの、やや悲壮な思いを抱きながら、その機会をうかがっている夕霧像のほうが、緊迫した作品として読めてくるはずである。別本の数本と河内本はそのように読んでいたはずであるし、確かにそのような本文が流布もしていたという事実は尊重すべきであろう。

②御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたるきはの、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しき事たぐひなし。ここら久しく悩みて、ひきもつくろはぬけはひの、心とけず恥づかしげに、限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて、こまかに見るままに、魂もしづまらむ方なし。（総角、五―二一六）

この場面の後、大君は「見るままにものの枯れゆくやうに、消えはて」てしまうが、その臨終間際の病床での薫から見た姿が描写される。長い間の病のため、「ひきつくろはぬ」とするように、彼女は顔の手入れもろくにしていないはずながら、用心して化粧などをしている者よりもはるかにまさった美しい「けはひ」で、彼はつくづくと見るにつけ、魂も身から抜け出るほどに魅了されたという。この「けはひ」について、保坂本では「けしき」とする。薫は大君の間近にいるだけに、対象を視覚的にとらえた「けしき」とするほうがふさわしいようにも思われるが、病床にあるだけに「ひきつくろはぬ」との判断は眼前のことではないだけに、想像した「けはひ」のことばを用いたのであろうか。これ以外の用例についてもそうなのだが、このように読んでいくと、保坂本としての一つの意味を持った世界が語られていることが知

られてくる。

三　「けしき」から「けはひ」へ

青表紙本での「けしき」が、別本諸本で「けしき」となるのは二〇語、その内訳は、もっとも多いのが保坂本の七例、次いで陽明本・阿里莫本の六例、麦生本・国冬本の四例などといったところである。保坂本の一例は、すでに引用した音羽山の秋の「けしき」（椎本）から「けはひ」への転換であった。さらにこの種の用例を、以下に検討してみることにする。

①風いと心細う更けゆく夜のけしき、虫の音も、鹿のなく音も、滝の音も、ひとつに乱れて艶なるほどなれば、ただありのあはつけ人だに寝ざめしぬべき空のけしきを、格子もさながら、入り方の月の山の端近きほど、とどめ難うものあはれなり。（夕霧、四―三九五）

夕霧は落葉宮への思いをつのらせるばかりながら、好意を示すだけではこれ以上の進展は望めないと判断し、いよいよ具体的な言動に移そうとした矢先、御息所は物の怪に患わされ、療養のため小野に移り住むことになった。八月の下旬、彼は病気見舞いという口実で小野を訪れ、女房が消息を伝えようと部屋の奥に入るのについて忍び入ってしまう。「宮はいとむくつけうなりたまひて、北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入りはてたまへれど、御衣の裾の残りて、障子はあなたより鎖すべき方なかりければ、ひき閉てさして、水のやうにわななきおはす」という、すでに考察したように、保坂本などの別本からするとかねての行動なのだが、夕霧としては思い切った挙に出たのである。薫が「障子の中」から大君の袖をとらえて一夜過ごした場面（総角巻）を想起させるが、夕霧も「障子をおさへたまへるは、いとものはかなき固めなれど、引きも開け」ることなく、ただそのままの状態で夜も更けていった。その後に続くのが右の場面で、虫の音をはじめとする舞台設定のなされた、情緒のある秋の夜更けだけに、どのような「あはつけ人」であっても目覚めるに違いない「空のけしき」だという。

この青表紙本の本文に対して、「空のけはひを」（保麦阿）、「空のけはひをかしう」（陽）と、別本では「けはひ」のことばを用いる。上げたままの格子からは、山の端に入りかけながら、また一段とふけゆく秋の夜空にかがやいているのであろうが、その眺めとしての「けしき」なのか、「虫の音」「鹿のなく音」「滝の音」といった聴覚と、「更けゆく夜のけしき」とが一つになり、情趣深さがまさった「空のけはひ」なのか、いずれも可能な表現のようである。ところが、『源氏物語』では「夕暮の空のあはれなるけしき」（藤袴）といったのも含めて、「夕暮のしづかなる空の

けしき」（夕顔）、「空のけしきもいたう曇りて」（少女）、「雪うち降りて空のけしきも、ものあはれに」（若菜上）、「日入り方になりゆく空のけしきも、あはれに霧りわたり」（夕霧）などと、空の景観を「けしき」と表現するのが圧倒的で、四四例拾い出すことができる。これには、大半の用例に異文はなく、いずれも空は「けしき」と結びついており、この法則性は以後の平安末期の物語でも変りはない。

ただ一つだけ、異例とも言うべき「空のけはひ」とする表現が総角巻に見いだされる。薫が匂宮のもとを訪れ、ひそかに中君を譲る約束をする場面に、

明けぐれのほど、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり。（総角、五―二五〇）

と、ここにはじめて「空のけはひ」のことばが用いられる。青表紙本の御物本が「空のけしき」とするくらいで、後の諸本はすべて大島本と一致しているだけに、「空のけはひ」として認知されていたはずである。しかし、大勢からすると、「空」と「けしき」の強固な関連性があるだけに、夕霧と落葉宮との場面も、保坂本などのように「空のけはひ」とするのは、情趣深さを高めようとするさかしらな改訂ではなかったかと言えなくもない。また、逆に「空のけはひ」の例が存するように、必ずしも不適切な表現ではないだけに、もともと「けはひ」であったものが、一般的に空は「けしき」とするだけに、そちらに引かれて手が加えられたと判断することもできてくる。これまでもくりかえしてきたように、私は二つのことばの優劣を断ずるつもりはなく、そのような本文が確かに存在し、読まれてきた事実を指摘したく思っているのである。

「空のけはひ」はもう一例、僧都の妹尼に引き取られて小野で過ごす浮舟が、自分の半生を回想する場面に、

秋になりゆけば、空のけしきもあはれなるを、門田の稲刈るとて、所につけたるものまねびしつつ、若き女どもは歌うたひ興じあへり。（手習、六―二八九）

と、青表紙本からすれば当然の表現である「空のけしき」が用いられる。これが別本になると、

空のけしきも―そらのけはひ宮保池国桃―空のけはひも阿―ナシ陽

といった状況を呈しており、河内本でも「けはひ」であり、さらに青表紙本の榊原家本・伝二条為氏筆本・三条西家本でも「そらのけはひ」、肖柏本も「そらのけはひも」とし、いわば大島本は今のところ孤立した本文といえる状況にある。数の上からは「けしき」の優位性は変らないにしても、「空のけはひ」とする表現は確かに存在し、『源氏物語』の世界でも語られていたとなると、「空」は必ず「けしき」とするものだとする論理はなりたたなくなるであろう。

②（落葉宮は）かたはらいたく、いかに言ひつることぞと

思さるるに、（夕霧）「げにあしう聞こえつかし」などほほ笑みたまへる気色にて、（夕霧、四―三九六）

夕霧は思いをうちあけて執拗に落葉宮に迫るものの、それ以上の振る舞いには出ず、ようやく夜明け近くになった場面である。落葉宮がつぶやくように口にした歌を、夕霧が忍びやかに復唱したため、彼女は歌を詠んだことを悔やむ様子に、「あしう聞こえつかし」と侘びながら「ほほ笑みたまへる気色」であったとする。夕霧は返しの歌を詠み、「月明かき方にいざなひきこゆるも」と誘い、彼女は拒絶するものの、「はかなう引き寄せたてまつり」と、月明りのもとに身をさらすことになってしまう。「月の顔に向ひたるやうなる、あやしうはしたなくて、紛らはしたまへるもてなしなど、いはむ方なくなまめきたまへり」と、これによって夕霧はあからさまに落葉宮の顔や姿をまのあたりにすることになったのである。

これは廂の間での場面のようで、「月明かき方」にいざなう前は、格子から月明りが差し込んでいたとはいえ、互いの顔もそれほどはっきりとは見えなかったに違いない。夕霧に対して「ほほ笑みたまへる気色」という敬意を示した表現は、誰からの視点による描写なのか、落葉宮は見ているはずはないし、語り手にしてもそこまで明確に言えないのではないかと思ったりする。これを、保坂本などの別本では「ほほ笑みたるけはひ」（陽保国）と、その場での夕霧の話しぶりとか、振る舞いから推測したのであろう、「けはひ」のことばを用いる。別本のこのような表現は、後人なり書写者の判断によるのか、物語の成立当初からのことばなのか明らかではないが、そのように読まれてきた本文も存在するという歴史的事実を、私は指摘しておきたく思うのである。

四　「けはひ」と「けしき」の挿入

青表紙本に用いられた「けはひ」が、別本諸本では二九例が脱落し、代りに二六例が挿入されており、「けしき」のほうは三〇例が継承されることなく、五二例が新たな描写として補われる。数だけからすると、別本では「けしき」がより多く取り込まれたといえるであろうか。ここでは、別本のとりわけ保坂本で加えられた「けはひ」や「けしき」の様相をすこし考察してみたい。

①御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましうおぼえたまふ。（桐壺、一―二五）

光源氏は、元服の後は「御簾のうちにも入れたまはず」との父帝の方針により、藤壺の姿を目にする機会もなくなってしまい、そのため右のように藤壺の琴に自らの笛の音を合せながら思い訴え、かすかな声を耳にすることによって心を慰め、正妻葵上のもとに通うよりも内裏住みを好むという仕儀

となってしまった。[9]「ほのかなる御声」とあるので、彼は藤壺も交えた合奏の折などは、御簾の近くに座を占め、傍らの女房たちとかわすことばなのであろうか、ほのかな声を聞きながらせめてもの慰めにしていたという。桐壺巻は保坂本の別本がないため、他の諸本と比校すると、

御声―御けはひばかりを御麦―御こゑけはひばかりきくを陽―御こゑけはひばかりをきくを国―御けはひばかりを河

とあり、「御声」と「御けはひ」との交替と、「御声」に「けはひ」が添えられた例との二つに分かれてくる。もともとは「けはひ」だけであったものが、青表紙本の「御声」の挿入によって生じた表現ではないだろうか。ただいずれにしても、「けはひ」の語は具体的な声ではなく、御簾越しながら見ることのできない藤壺の身じろぎをする気配によって心を慰めたとするほうが、この場面にはふさわしいように思われる。ただ、顔や姿は目にすれば「けしき」と表現するものの、「声」は視覚とは異なるだけに、「けはひ」と表現する例が多く、それだけに両者は入れ替えられる場合もあったのであろう。

②（浮舟は）いとものつつましくて、また鄙びたる心に、答へきこえんこともなくて、「年ごろ、いと遥かにのみ思ひきこえさせしに、かう見たてまつりはべるは、何ごとも慰む心地しはべりてなん」とばかり、いと若びたる声にて言ふ。（東屋、六―六六）

二条院に身を寄せていた浮舟のもとに、思いかげなくも匂宮が忍び入った後、驚愕のあまり傷心した浮舟を中君が部屋に招いて慰めるのだが、姉のことばを尽くしてのやさしさながら、彼女は田舎住まいの身であっただけに返事のしようも知らず、かろうじて会うことのできた喜びを「いと若びたる声」で言うにすぎなかった。乳母は「ひき起こして参らせたてまつる」と、強引に中君のもとに連れて来たものの、当の浮舟は「我にもあらず」といった状態で、ただ「押し出でられてゐたまへり」と、自覚のないまま据え置かれ、ひたすら恥ずかしさに身を固くするありさまだった。中君は二十六歳、浮舟は二十一歳ばかりなので、立派に成人した女性として目に写ったはずである。しかし、その据えられたように座っている浮舟からは想像できなかったのだが、彼女の声づかいはいかにも若々しかったとする。ただ、一般的に成人した女性が「若びたり」と評される場合は好意的な表現ではなく、[10]そこにはやや成長しきれていない者に対する批判的な意味が込められる。浮舟は緊張していたせいもあるのだろうが、「若びたる声」で返答したようで、それは幼いころから苦労をし続け、「若びたる」とも表現されたことのない中君とは対照的な姿であったともいえよう。①においても、「声」と「けはひ」の交替が見られたが、ここでも保坂本などは「いと若びたるけはひなり」（御保河）と、中君の目か

ら見た判断なのであろう、声だけではなく、そのぎこちない態度も含めて「けはひ」と表現する。

③かくおはしましたるにつけても、悲しくいみじきことを上下の人集ひて泣き騒ぐを、と聞きたまへば、（蜻蛉、六―二一二）

浮舟の急逝を聞いた薫は、匂宮が隠したのではないかとの疑いを抱きながら宇治を訪れると、上下の人々が集まって騒がしいほど泣いている様子に、その死は確かであったのかと、今さらながら思わずにはいられなかった。現代の注釈書はすべて「泣き騒ぐを、と聞きたまへば」と読点を付すが、諸本の異同をみると、

なきさはくをとを―なきさはくけはひを宮国―なきさはくおとを陽保―なきさはくを麦―なきもさはくを阿

とあり、「泣き騒ぐけはひ」であり、「泣き騒ぐ音」と解釈されていたことが知られる。青表紙本でも、横山本や池田本では「なきさわくをとを」と、「音」とし、「を」と「と」を分離する態度ではない。青表紙本でも女房たちが「泣き騒ぐ音」を薫が聞いたと解釈しても不都合はなく、その音が「けはひ」の異文を持つようになるのは、「声」と同じく直接見ることはできないものの、部屋の中での様相が騒然とした雰囲気やもの音だったからにほかならない。

「けしき」が新たに加えられた例も少し検討しておくと、

④宮（蛍）、大将（鬚黒）などは、殿（光源氏）の御気色、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。この岩漏る中将（柏木）も、大臣の御ゆるしを見てこそかたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、下り立ち恨みきこえまどひ歩くめり。（胡蝶、三―一八三）

光源氏が、六条院に引き取った玉鬘を「すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」と企てた通り、「対の御方（玉鬘）に、人々の御文しげくなりゆく」と、思いを寄せて文を届ける人の数がふえはしたものの、彼は「人選りして答へなどはせさせよ」と厳命し、「宮、大将は、おほなおほななほざりごとをうち出でたまふべきにあらず」と、この二人に関しては返事をむしろ勧めるありさまであった。さらに彼が目にとめた中に柏木の文があり、右近の説明によると、「かれは、執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中将（柏木）の、このさぶらふみるこをぞ、もとより見知りたまへりける伝へにてはべりける」と、童女のみるこを手づるにして、とにかく執拗に置いていったのだという。光源氏は、「下臈なりとも、かの主たちをば、いかがいとさははしたなめむ」と、疎略にはできないとし、「おのづから思ひあはする世もこそあれ」と、いずれ柏木は玉鬘が姉と知ることになろうと述べる。

蛍宮や鬚黒などは、女房などから光源氏の「御気色」の様子を伝え聞いたのであろう、まんざらでもなかったと知る

と、これまで以上に熱意をこめて文をしたため、思いのほどを訴えてくる。柏木はといえば、「大臣の御ゆるし」を知り、ひたすらそのことがうれしく、ひと言の返事でもほしいと恨みながら、六条院のあたりをいつもうろうろしていたという。「かたよりに」は、『細流抄』の「一方むきにと也」とするのがその後継承されるが、宣長は「見てこそ」以下を「みるこがたよりに」と、童女の「みるこ」の伝言によって、柏木は知ったと解釈する。もっとも、『岷江入楚』で「私、此詞なし、如何」とするのは、河内本がこの語句を持たないことを意味しているようである。

さて、この部分について保坂本を見ると、

おと、の御けしきをのきゝてかたよりにほのきゝて

（傍線はミセケチ。なお、この部分の『源氏物語大成』の校異では、ミセケチの指摘がない。）

とあり、このミセケチを生かすと、「大臣の御けしきをほの聞きて」（これは河内本によって訂正した結果なのであろう）となり、童女のみるこか誰かはともかく、柏木は光源氏の「いかがいとさははしなためむ」という、許してもよいとの「けしき」を間接的ながら耳にしたことになる。源氏が右近に話していたのを聞き齧り、後半の「いずれ姉と知るだろうから」とのことばは耳にしなかったのか、柏木から手紙を託され、その結果を執拗に迫られた童女が伝えた背景が読みとれそうである。ただ、保坂本を子細に見ると、判読しづらいが「けしきをのきゝて」の下には「ゆるしをみしこそ」とあったようで、それを削って上書きしている。かなり本文にゆれがあったようで、削除前の本文だと、柏木は光源氏の許してもよいような様子を見たためますます思いを寄せ、さらに童女からの報告なのであろう、「ほの聞きて」とそれとない意向まで耳にしたものだから、彼は事情もしらないまま夢中になった、とたどられそうである。これが「けしき」となると、柏木は間接ながら、光源氏には好意的な顔色があったとの知らせを受け、さらに童女からの情報もあわせ、なおさら確信するにいたったということになるであろうか。

蛍宮や鬚黒が、「殿の御けしき」を右近から聞き、一層熱心に言い寄ったのと変らない行動であったことになる。青表紙本でも、この部分は不明な表現とされてきたが、「御ゆるしを見てこそ、かたよりに」は、光源氏の「御ゆるし」の気配を見知ったからというものは一途な思いがつのるし、「ほの聞きて」と、童女から「いかがいとさははしたなめむ」とのことばを聞くと、玉鬘の素性など知らずに一途な思いがさらに昂じていった、と解釈できるのではないか。「けしき」は、このように他のことばとの交替だけではなく、

○御耳とどめさせたまはぬも、（柏木、四―一八一）―御耳とどめさせたまはぬ御けしきも保―給はぬ御気色の国

○いかさまにしてこのなめげなさを見じ、（夕霧、四―四六七）―いかさまにてこの御けしきのなめげさを御陽保

などと、より具体的に描写しようとする意図からなのであろうか、「けしき」を挿入して説明しようとする場合なども多く見られる。

これまでいくつか取り上げてきたように、「けはひ」にしても「けしき」にしても、保坂本なら保坂本の中でそれぞれの意味を持ち、青表紙本とはまた異なる、別の世界を構築したことばとして存在していることを知るであろう。それがどのような意義を持つのか、本文の原形にまでたどることはできないまでも、青表紙本と拮抗するか、あるいはそれ以前から読まれていたという事実は無視するわけにはいかない。このようなことばを蓄積していくことは、やがて保坂本に限らず、それぞれ伝来した本文のトータルとしての世界を解明していくことになるであろう。

注

(1)松村博司編『栄花物語の研究　校異篇』（昭和六十年、風間書房）

(2)池田亀鑑『紫式部日記』（昭和三十六年、至文堂）の「紫式部日記考証」による。

(3)萩谷朴『紫式部日記全注釈』（昭和四十六年、角川書店）

(4)拙稿「保坂本源氏物語（文化庁蔵）の伝来と書誌」（「源氏物語研究」第二号、平成四年五月）

(5)陽明文庫本については、拙稿「陽　明　文庫本源氏物語の方法」（「国語国文」平成五年一月）に、その本文の性格について考察したことがある。

(6)根来司「八代集と『けしき』」（『研究発表　中古語中古文学』所収、昭和五十八年、笠間書院）

(7)中川正美「枕草子の『けしき』」（「平安文学研究」第六十輯、昭和五十三年十一月）。ちなみに、『校本枕冊子』総索引によると、本文による違いもありはするが、「けしき」は五十余例、「けはひ」は九例を見いだす。なお、ほかに梶井恵子「中古の『けしき』と『けはひ』」（「立教大学日本文学」第六四号、平成二年七月）がある。

(8)青表紙本以外の本文を対象した成果としては、渡辺仁作著『河内本源氏物語語彙の研究』（昭和四十八年、教育出版センター）、岩下光雄『源氏物語の本文と享受』（昭和六十一年、和泉書院）等がある。

(9)拙稿「光源氏と藤壺との運命」（『源氏物語の探究』第十六輯所収、平成三年　風間書房）

(10)『源氏物語』において「若び」とされるのはすべて女性に向けられてのことばで、一六例見いだされるが、その対象は夕顔（三）、若紫（一）、紫上（一）、末摘花（一）、侍従（一）、朧月夜（一）、玉鬘（三）、女三宮（二）、落葉宮（一）、浮舟（二）となる（数字は使用され数）。夕顔・若紫・女三宮はそのように表現されるのも分らないでもないが、末摘花は光源氏への予防線もあって、命婦が「いと若々しうおはしますこそ心苦しけれ。限りなき人も、親などおはしてあつかひ後見きこえたまふほどこそ、若びたまふもことわりなれ」（末摘花）とし、それに反して「若び」ているため、はきはきと男君に応対もできないとする。朝顔のことで腹を立てる紫上に、源氏は「いといたく若びたまへるは、たがならはしきこえたるぞ」（朝顔）と批判し、玉鬘には「いまはうひうひしく若びたまふべき御ほどにもあらじを」（玉鬘）と教訓もする。

付記―保坂本は、拙編『保坂本源氏物語』（全十二巻　一九九五～九六年刊、おうふう）による。なお、本稿は科学研究費（平成八年度）による成果の一部である。

（いい・はるき　本学教授）